受講ノート 2017　　From 蕨由美の Facebook

アンドレア師のキリスト教美術史講座

In　船橋学習センター「ガリラヤ」

2017 年 5 月 24 日

船橋学習センターガリラヤでの 2017 年度初めてのアンドレア・レンボ師の新講座「ヨハネによる福音」の第 1 回目の受講ノートです。

今回は、4 つの福音書の成り立ちの歴史と系統と共通点、その中でヨハネの福音の特異性についてお話があり、その熱っぽさに惹きこまれてお聴きしてきました。

四福音書と使徒言行録に共通するのは、文頭、「ARCHE」（＝はじめに・根源的）の内容（イエスの受洗＝マルコ・マタイ、「最初からの目撃」＝ルカ）から書かれ、特にヨハネの「初めに言があった。言は神と共にあった。」から始まる。

主の復活と初代教会の始まりは紀元 30 年、パウロが宣教しつつ教えを書いた書簡（テサロニケ宛てなど）は 50 年ごろで、そのころは、主についてイエスと生活を共にした使徒たちから直接話が聞けたが、その後、目撃者も少なくなり、主イエスの生涯を伝えるために、60 年ごろから 100 年ごろまでに福音書が書かれたとのこと。

四福音書の福音家のシンボルが四つの生き物（ルカ＝人の顔をしたもの、マルコ＝獅子、ヨハネ＝鷲、ルカ＝牡牛）で表現されるのは、黙示録のヨハネの幻視から。

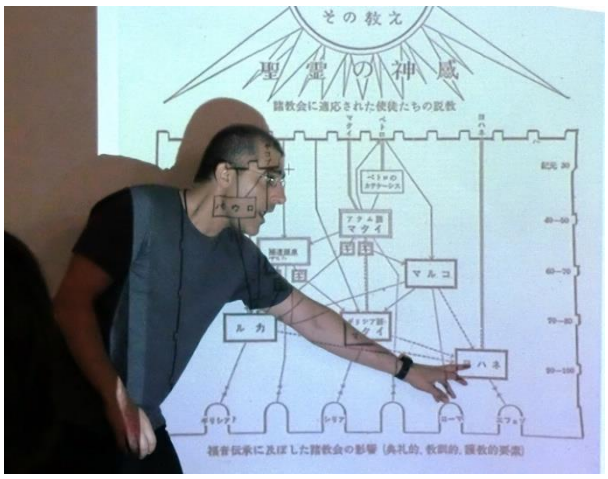
マルコ・マタイ・ルカの三福音書は、共通する記述が多く「共観福音書」と呼ばれ、ペトロの指導する初代教会内での口伝や書伝をもとに書かれたとされるのに対し、最後に書かれたヨハネ福音書は直接、神の子イエスの姿とその愛をうかびあがらせる内容で、著者は「イエスの愛しておられた弟子」（＝ヨハネ）。

ヨハネは晩年、エフェソで独自の教団をもち、「イエスの胸によりかかった」自分がイエスと一心同体である自負とインスピレーションで福音書と黙示録を書いたとのこと。

今日は、ここまでで、次回の展開が楽しみな講座でした。

なお、講座が終わってから、先月府中教会に赴任され、昨日が誕生日であったアンドレア神父様を囲んでささやかな昼食と懇談のひとときを持ちました。

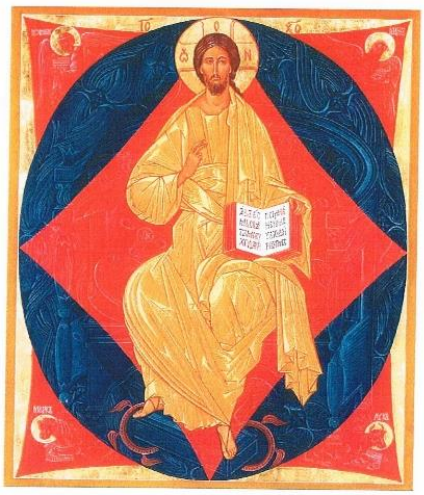
今日から、府中教会の主任司祭になったアンドレア神父の講座「ヨハネ福音書」が始まりました



福音書の成立過程の説明。

ヨハネ福音書は独自に「主に愛された弟子」としての自分の体験と啓示で福音書を記した。

Tetramoforo, 福音書の表紙、クリュニー修道院, IX 世



救世主キリスト

中央に救世主イエス、四隅に四福音家のシンボルが描かれた彫刻とイコン。

下のイコンの中の主の持つ聖書の部分は「はじめに言葉があった・・」のヨハネ福音書の冒頭部分。

Abraham Bloemaert 1566 – 1651

4人の福音宣明者』 (1615年)

oil on canvas (178 × 222 cm) — c. 1612

バロック時代の絵画

ヨハネは、天を仰いで啓示を受けている姿（その左上にシンボルの鷲が描かれている）

左端はマタイ、その右がマルコ、右端の天使（ルカのシンボルだが、黙示録では「人のような顔」）に手を置かれている後姿がルカ。

2017 年 6 月 7 日

今日、午前中は、船橋学習センター「ガリラヤ」でのアンドレア師の「ヨハネによる福音」の第 2 回目の講座をお聴きしてきました。今回は緒論として、ヨハネ福音書全体の構成とその特徴と、そのプロローグの内容についてでした。

共観福音書、特にマタイ書などが初心者の信徒向けにイエスの事績を簡潔に記しているのに対して、ヨハネ福音書は、ヨハネの神学に精通した信徒を対象に書かれていることから、複雑でわかりにくいとのこと。

その構成は「プロローグ」・「徴（しるし）の書」・「栄光の書」・「エピローグ」からなり、メインは「栄光の書」で、12 章の「人の子が栄光を受ける時がきた。～一粒の麦が～もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。」から、聖木曜日と聖金曜日の典礼で読まれる最後の晩餐と受難・復活、20 章のトマスへの「見ないで信ずる者は、さいわいである」～「あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じイエスの名によって命を得るためである」までで、「見ないで信ずる者」とは、イエスと直接接していない読者（後世の信徒＝私たち）を指し、ヨハネの強い自負心を示している。

プロローグは、「初めに言があった。言は神と共にあった。」で始まる神であるみ言葉への賛歌の韻文と、洗礼者ヨハネによるイエスと自身ついての証言の散文からなり、その文言はタペストリーの表と裏に渡される横糸のように旧約の言葉に貫かれて、命と光、恵みと心理を織りなしている。

他の共観福音書での洗礼者ヨハネの姿は、荒野で人びとに「悔い改め」を迫って叫ぶ姿だが、ヨハネ書では「彼（＝洗礼者ヨハネ」は光ではなく、光（＝イエス）についてあかしをするためにきた」（1：8）と説く姿を描いている。

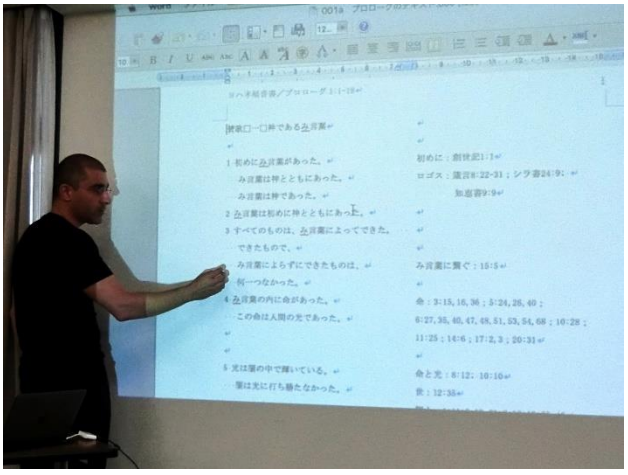
最後に、洗礼者ヨハネを描いた絵画を通しての解説。

ギルランダイオ「洗礼者ヨハネの説教」（1486-90）は、ジョットの青を思わせる色使いの絵で、パリサイ人と二人の彼の弟子シモン・ペトロとアンデレに、イエスが神の子とあかしする場面を描く。

初期ネーデルランド絵画の画家ヘールトヘン・トット・シント・ヤンスの「荒野の洗礼者ヨハネ」は、荒野で物思いにふけるヨハネの傍らに「神の子羊」（1：36）がやさしく寄り添う姿。

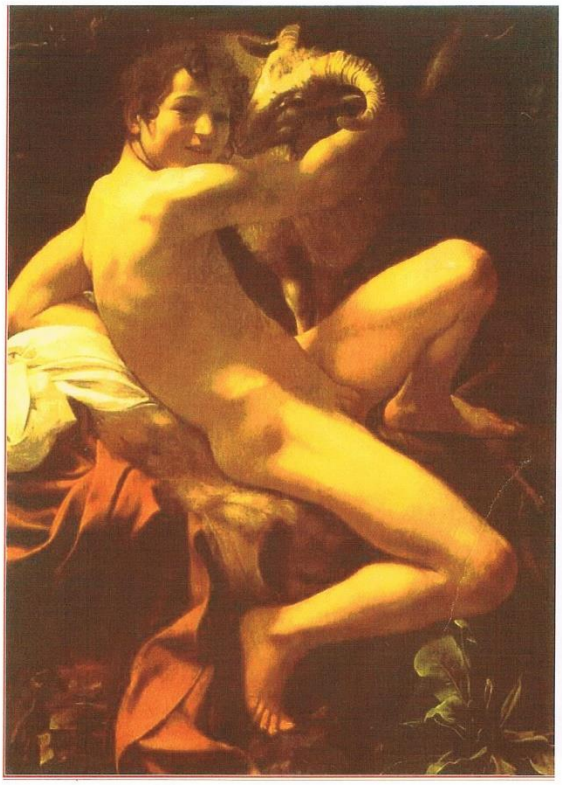
また、バロック時代のカラヴァッジョは、「子羊」を純真な少年が抱く姿で洗礼者ヨハネを描いているが、当時としてはかなりショッキングな絵であった。「子羊」はヤギのようにリアルで、苦悩する人間の姿のイエスを暗示しているとのこと。

ヨハネ福音書の深さを堪能させられた 2 時間の講座、次回も楽しみです。



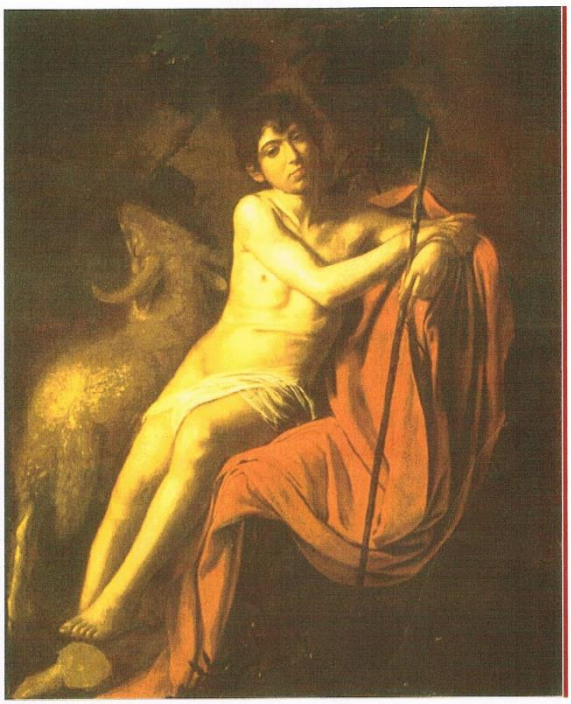
ヨハネ書の言葉の一つ一つに旧約の深い意味が込められている

Domenico Ghirlandaio 1449 – 1494
The Preaching of the Baptist
fresco — 1486-1490
Santa Maria Novella, Florence



Caravaggio 1573 – 1610
St John the Baptist (1602)
oil on canvas (129 × 94 cm) — 1602
Galleria Capitolina Roma

Geertgen tot Sint Jans ca. 1460/65 – ca. 1488/93
John the Baptist in the Wilderness
oil on panel (42 × 28 cm) — c. 1490
Gemäldegalerie der Staatlichen Museen



Caravaggio 1573 – 1610
St John the Baptist (1609/10)
oil on canvas (159 × 124 cm) — 1609 or 1610
Galleria Borghese Roma

2017 年 6 月 21 日

今日は風雨の中、船橋学習センター「ガリラヤ」でのアンドレア師の「「ヨハネによる福音」の第 3 回目の講座を聴講してきました。

今回の講座は、「徴の書」第 2 章 1～11 のカナの婚礼の場面から、「イエスの母」についてでした。

旧約で「婚礼」は「神と民の契約」に例えられて、また注がれた水から変化した「良いぶどう酒」は「新約」を意味する。

ヨハネ書では他の共観福音書と異なり、「マリア」という名は出てこず、「イエスの母」（イエスの言葉では「婦人よ」）とのみ記されているが、「最初の徴」での登場の意味は大きく、再登場は、19 章 25 のイエスの十字架のそばにたたずむ「イエスの母」で、受難と救いが終結する。

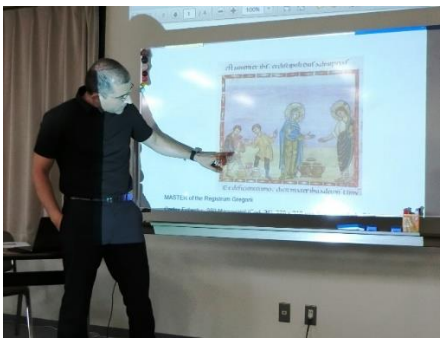
16 章 20～22 では、喜びに至る苦しみを、妊婦の産みの苦しみに例えている。

ヨハネ書の特徴は、女性たちへまなざしと、「その時ではない」～「その時がきた」と繰り返し「その時」を予告し、「その時」の流れを明らかにしていくこと。

19 章 29～30 でのイエスの最期にさし出された「酸いぶどう酒」は「すべては終わった」という言葉と共に「旧約」を意味し、19-35「やりでそのわきを突きさすと、すぐ血と水とが流れ出た」で、カナの婚礼での「水から良いぶどう酒への変化」の徴が完結する。

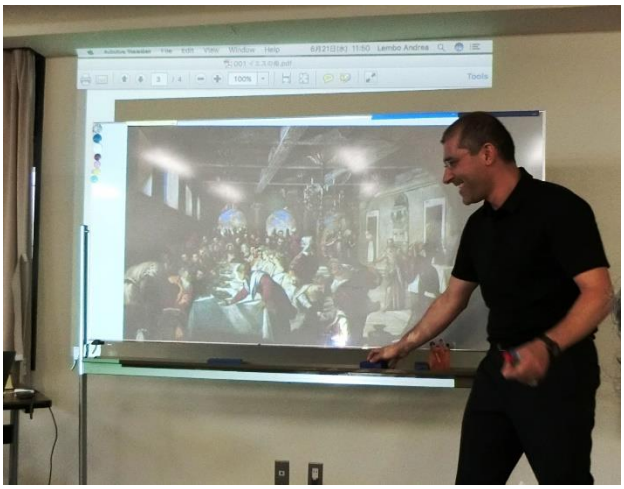
ヨハネ書のストーリーとメッセージの壮大さに、只々驚嘆しました。

後半は、カナの婚礼をテーマにした美術講座で、その描かれた時代の風俗や当時の神学や考え方、先行する有名な作品からの影響など、楽しく拝見しました。



MASTER of the Registrum Gregorii
Codex Egberti c. 980 Manuscript (Cod. 24), 270 x 210 mm Stadtbibliothek, Trier

10 世紀の聖書の挿絵　「イエスの母」の願いで、瓶から注がれた水がぶどう酒になる場面



16 世紀　ティントレットの作品
ベネティアの豪華な邸宅、男女が向かい合って座る

DUCCIO di Buoninsegna
Wedding at Cana (scene 5) 1308-11 Tempera on wood, 44 x 47 cm
Museo dell'Opera del Duomo, Siena

PRETI, Mattia
Wedding at Cana c. 1655 Oil on canvas, 203 x 226 cm
National Gallery, London

上の 14 世紀の絵は、「最後の晩餐」のイメージ
下の 17 世紀の絵は、バロック期カルバッチョの影響が大

TINTORETTO
Marriage at Cana 1561 Oil on canvas, 435 x 535 cm Santa Maria della Salute, Venice

VERONESE, Paolo
The Marriage at Cana (detail) 1563 Oil on canvas Musée du Louvre, Paris

下のベロベーゼの絵は、最後の晩餐とラファエロの「アテネの神殿」のミックス「された構図

村上さん、司会ありがとうございました。

2017 年 7 月 5 日

今日は、船橋学習センター「ガリラヤ」での、アンドレア師の「ヨハネによる福音書」講座の「イエスの母」の続きを聴講してきました。

講座は、前回の「カナの婚礼」の解説から始まりました。

一週間も続く当時の婚礼。「結婚」は「神と民の契約」にも例えられ、ぶどう酒はその契約のためにも必須であった。

「三日目にガリラヤのカナに婚礼があって、イエスの母がそこにいた。…ぶどう酒がなくなったので、母はイエスに言った、『ぶどう酒がなくなってしまいました』」(ヨハネ 2-1～3)、婚礼の半ばでぶどう酒を切らすことは契約の不成立にもなりかねない事態であったという。水から新鮮でおいしいぶどう酒への変化は、イエスによる新しい契約のしるしであった。

新しい家族を生む契約は、十字架上のイエスの母への言葉「イエスは、その母と愛弟子とがそばに立っているのをごらんになって、母にいわれた、『婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です。』それからこの弟子に言われた、『ごらんなさい。これはあなたの母です。』」(19-25～27)で成就する。

後半の美術史解説は、ミケランジェロ 24 歳の傑作「ピエタ」と晩年の未完成の「ピエタ」、さらにこの彫刻にインスピレーションを得て描いたダリの「ピエタ」についてでした。

6 歳で母を亡くしたミケランジェロは、ピエタの聖母像に若い母の姿を遺したという。ヨハネは、栄光への苦しみを出産の苦しみに例える(16-21)。

若き日のピエタ像の「イエスの母」は、赤子のように眠るイエスを抱く。

一方、晩年の「未完成」のピエタ像は、母がイエスを支えているようにも、イエスが母を背負っているようにも見え、「支え、支えられる」人生を象徴している。

ミケランジェロの思想と信仰に学んだダリは、この二作品をモチーフに、この世のつらい部分や破壊された世界を、母子像の肉体の中に描いているとのこと。

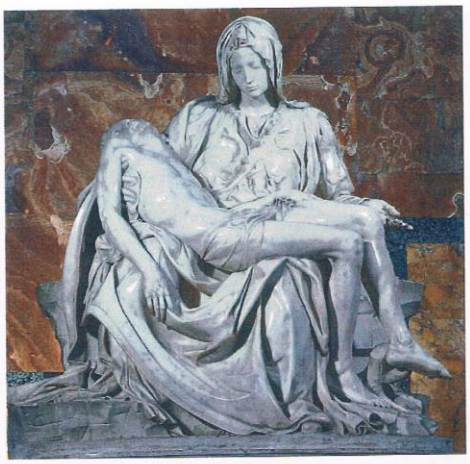
具体的で深い内容のアンドレ師の講座は、今回も満席に近い聴講者で好評でした。

カナの婚礼で水をぶどう酒に替える場面のイコン

若きミケランジェロの傑作「ピエタ」

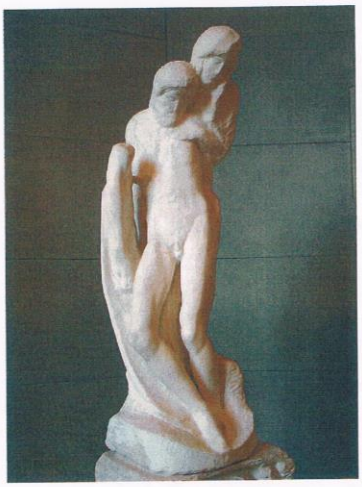
晩年のミケランジェロの未完成の「ピエタ」

ヨハネによる福音書–イエスの母



MICHELANGELO, Pieta`

Marble, 174 cm × 195 cm (68.5 in × 76.8 in) St. Peter's Basilica, Vatican City

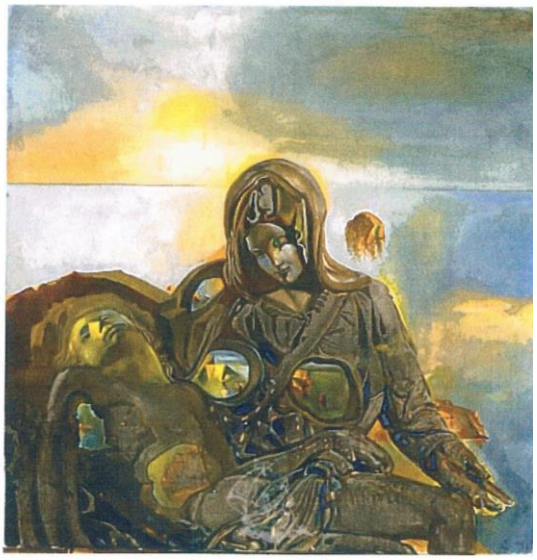


MICHELANGELO,

Pieta` Rondanini Stone195 cm (77 in) Castello Sforzesco, Milan

ダリの「ピエタ」

ヨハネによる福音書–イエスの母



Salvador Dali

Geological Echo. La Pietà - 1982 - Oil on canvas, 100 x 100 cm. (39.4 x 39.4 in)

Teatre-Museu Dali, Barcelona

Salvador Dali La Pietà - 1982 -

2017 年 7 月 19 日

午前中、船橋学習センターガリラヤでのアンドレア師のヨハネ福音書の講座を受講。

今回のテーマは、「ニコデモ」についてでした。

彼はヨハネ福音書に登場するファリサイ派のユダヤ人指導者で、宣教の始めにイエスと問答をし（ヨハネ 3-1)、祭司長たちがイエスを捕えようとした時に弁護をし（7-50)、そしてイエスの遺体を埋葬する際には多量の没薬と沈香を提供している。(19-39)

ニコデモの問いに、「信じる者が永遠の命を得るため、ひとり子を遣わした神の愛」などイエスは確信的な救いへの教えを説き続けるが、ヨハネの記述から彼の姿はいつの間にかフェードアウトし、「水と霊」による生まれ変わり（＝洗礼）など、初代教会とヨハネ教団の信仰体系が反映、展開されていく。

ニコデモは、イエスを求めて尊敬しているが、信仰に関しては未完成の人物として描かれており、登場する三場面は「夜」（＝暗闇）であった。

イエスの言葉をゆるぎない信仰をもつのは女性たちで、逡巡しているのは弟子を含む男性たちのほう。ニコデモもそういう「信じる」ことにためらいをもつ私たちの代表ともいえる。

後半の美術史講座では、14～17 世紀の名画「十字架降下」の場面を丁寧に解説いただいた。

14 世紀のジョットの絵では左上の木（復活を表す春の樹）から右下のイエスの遺体へ視線が集まり、夜空の青に嘆き悲しむ天使が舞う。足元の女性はマグダラのマリア、両手を上げるポーズはヨハネ、右端に墓を用意したひそかな弟子アリマタヤのヨセフ、そして左に白いストラを着けたニコデモの姿がある。

Giotto,十字架の降下,1303-1305

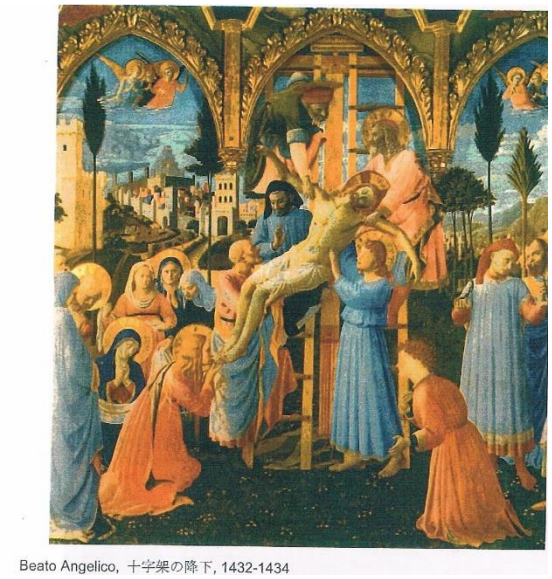
ジョットの「十字架降下」

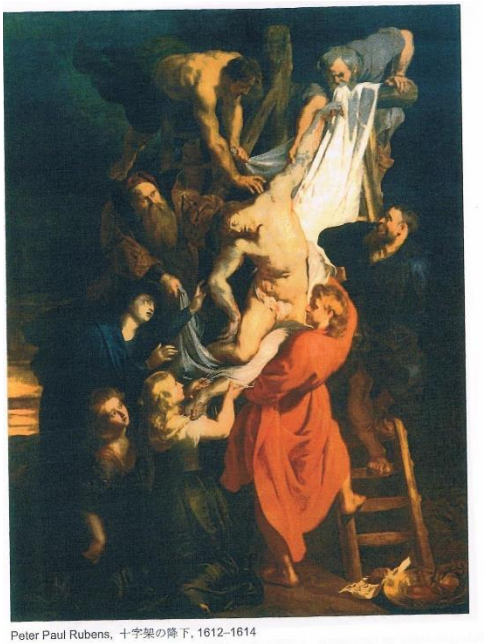
15 世紀のベアトアンジェリコの絵では、ルネッサンス初期の風俗の中と、ギリシャ文字の X の構図によるイコンの世界の中に、黒頭巾のニコデモも描かれている。

17 世紀のバロック絵画では、ルーベンスとカラヴァッジョ。

前者はイエスの遺体の重さを強調、左の髭の人物がニコデモ、右の赤服がヨハネ。

ベアトアンジェリコの「十字架降下」

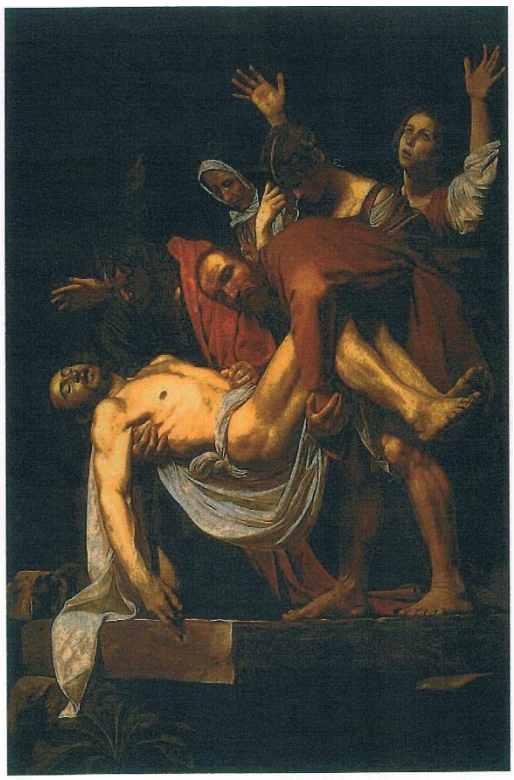

Beato Angelico, 十字架の降下, 1432-1434


Peter Paul Rubens, 十字架の降下, 1612–1614

ルーベンスの「十字架降下」

カラヴァッジョは重い遺体を墓石の下に納める場面、闇を照らす光の中に、三位一体を示すイエスの右手など聖画の約束事を守りつつ、写実性と豊かな感情を表現している。両足を抱えるニコデモがミケランジェロの顔であるのも衝撃的。

以上、昨日の講座は、共鳴しつつも信仰には至らないニコデモという謎の人物を通し、イエスの周りには、さまざまな立場と信条をもつ人々いて、支えていたという認識を新たにすることができました。


Michelangelo Merisi da Caravaggio, 十字架の降下, 1602-04

2017 年 10 月 11 日

アンドレア・レンボ師の講座「ヨハネ福音書と西洋美術史」（７）を受講してきました。

ヨハネ福音書９章の「生まれつきの盲人を治す」がテーマでしたが、他の共観福音書に書かれているような「盲人の開眼の奇蹟」（あなたの信仰があなたを治した）の叙述とは違って、ヨハネ福音書では「光と闇」の神学的な意味がとても深くて、難しかったです。

ヨハネ伝では、本人か両親の罪のせいで目が見えないとされていた盲人を、イエスは「神のみわざが現れるため」で、「私は世の光」を言って、一方的にいやされますが、安息日であったことから、この行為はパリサイ人から非難をあびせられ、この目の開いた盲人も再三厳しく尋問されます。彼は、最初は目が開かれた事実のみを、さらに追及されて、イエスを「預言者だと思う」、そして「神を敬いそのみこころを行う人」と証言し、外に追い出されたところで、まだ顔を知らないイエスに会い、その「人の子を信じるか」という言葉で、「主よ、信じます」と信仰宣言をするという４つの過程が丁寧に述べられています。

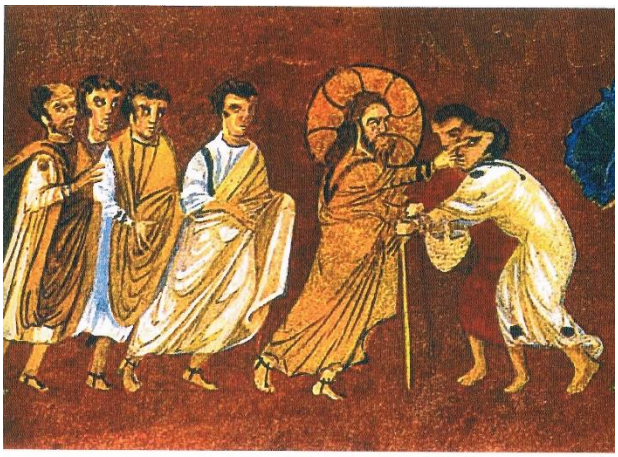
ヨハネの一貫した主張は、「闇の中で輝く光」は「み言葉」であり、「人間のための光」であったが、「闇は光を受け入れなかった」ということ。盲人はみ言葉を聴いて光を見たが、「見えていても見えない」人がいるのも現実で、厳しい迫害を表している叙述の中に、初代教会とヨハネ教団が体験していた１世紀末の状況が反映されているとのことでした。

美術講座は、最初に 6 世紀ギリシャのイコン（Codex sinopennsis）。盲人の白衣は洗礼式を意味、物乞いの入れ物と杖は、後に巡礼者のアイテムとなるとのこと。

２番目の絵は、ルネッサンス期のエルグレコの作品。左のイエスと盲人に対し、非難する右側の集団との間隔が強調されています。

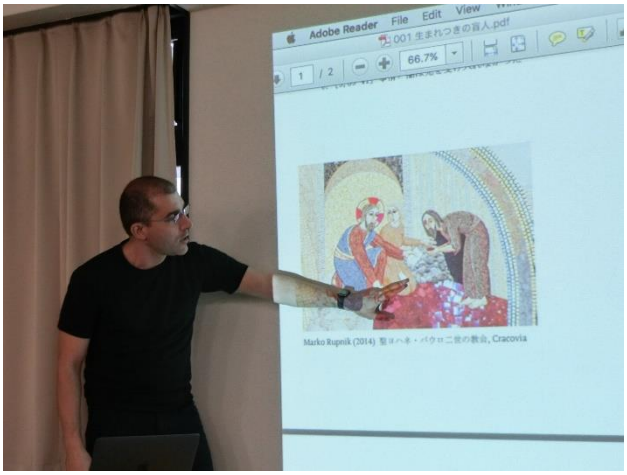
最後は、現代の Maruko　Rupnik の作品。ポーランドの聖ヨハネ・パウロ 2 世教会のモザイク画だそうです。盲人治癒の後につづくラザロの復活に共通する描き方で、イエスと盲人（or　ラザロ）が同じ顔に描かれていることに注目、中央の女性は、願いを聞えるラザロの姉妹か、聖母マリアでしょうか。

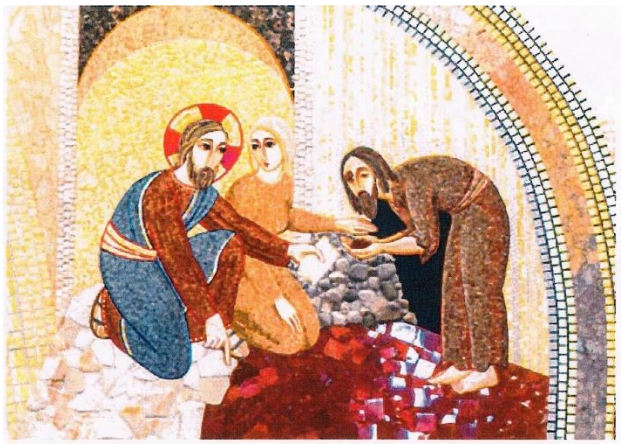
今回も、内容がいっぱい詰まった講座でした。



Codex sinopensis (VI sec.) 国立図書館, Parigi

El Greco, 生まれつきの盲人, 1567, Gemäldegalerie, Dresda





Marko Rupnik (2014) 聖ヨハネ・パウロ二世の教会, Cracovia

2017 年 11 月 15 日

アンドレア・レンボ師の「ヨハネ福音書と西洋美術史」の 8 回目を受講してきました。

今回の講座は、「ラザロの蘇生」。

ベタニアで暮らすマリア・マルタとその弟のラザロはイエスにとって特に親しい家族でした。(ルカ 10:38-42)

「ヨハネ福音書」11 章では、そのラザロが病で死んで 4 日目。イエスは、愛するラザロの死を悲しみ、涙を流す。そして、イエスが墓の前で、「ラザロ、出てきなさい」というと、布にまかれた死者が出てきた。これを見たユダヤ人たちはイエスを信じ、一方、その指導者たちはイエスを殺す計画をしはじめる。

今日の講座では、四福音書のうち、ラザロと姉妹の物語が書かれているのはルカ書とヨハネ書のふたつ。ルカとヨハネは、初代教会でも周辺部のエフェソの教会で交流と情報の交換があったと推測される。ヨハネ書では、ラザロの蘇りはイエスの復活を表すと共に、一度死んで新たに生まれ変わる「洗礼」を表している。初代教会当時の洗礼式は、プールの水に体を沈めてから立ち上がる「死からの再生」の式で、この章の叙述には初代教会のカテキズムが反映しているそうです。

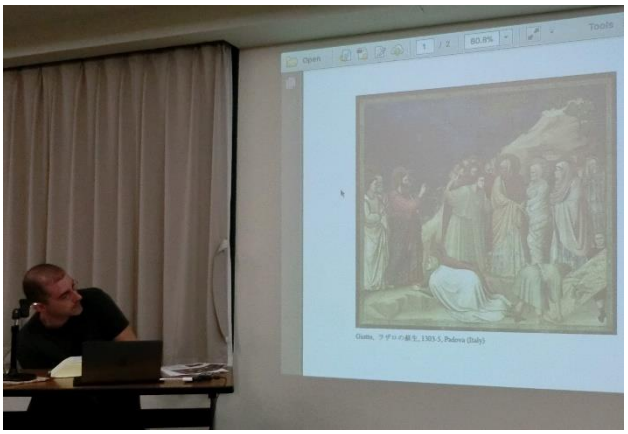
愛する人の蘇りは、涙を流したイエスを通して表された父である神の愛のみわざであって、イエスの友は最後に共に復活することを表しているとのことでした。

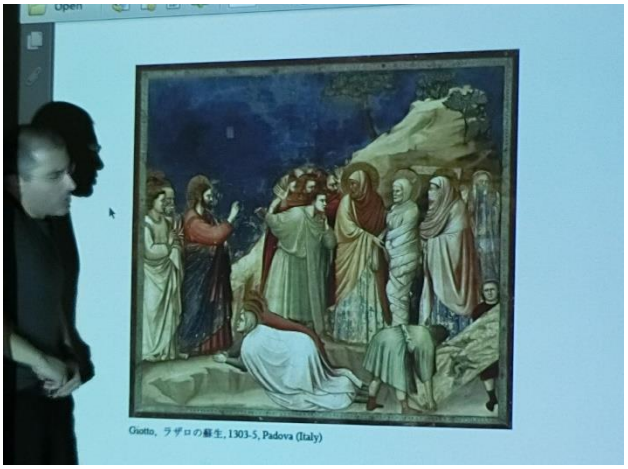
美術講座では、ジョットの 14 世紀初頭のフレスコ画と、17 世紀初頭のカラバッジョの作品、そして 19 世紀のゴッホの作品の見所解説でした。

ジョットの絵は、イコンの伝統画法の中にもルネサンス絵画に見られるような動きがあり、イコンのように三位一体の指を示すイエスのもとにひざまずくマリア・マルタ姉妹、墓から出て立つラザロ（「立つ」とは洗礼式での一度沈み「立つ」行為）、臭いで顔を覆う近親者の姿などリアルに描かれています。

カラバッジョの絵は、ある事件からの逃亡生活の中で描かれた闇の中のかすかな光が印象的な作品。男たちは労働者、マリア・マルタは娼婦のような姿で、ラザロの身体はピエタの構図。またイエスの手はジョットの伝統を受けつつ、ミケランジェロの天地創造の神の手の動きを再現し、その指先の男の顔は作者の自画像とみられるとのこと。

一方、光りにあふれ柔らかなタッチのゴッホの絵に描かれているのは、ラザロとマリア・マルタの三人でイエスはいない。作者の視点＝イエスなのか、羊のような山、あるいは太陽がイエスかと想像させるすばらしい作品でした。





2017 年 11 月 29 日

今日午前中は、船橋学習センターでのアンドレア・レンボ師の「ヨハネ福音書と西洋美術史」講座の 9 回目、テーマは「愛弟子、ペトロ」でした。

ヨハネによる福音書では、ペトロと「イエスの愛しておられる弟子」の二人がセットで登場する場面が多い。

「弟子たちのひとりで、イエスの愛しておられた者が、み胸に近く席についていた。そこで、シモン・ペテロは彼に合図をして言った、『だれのことをおっしゃったのか、知らせてくれ』。その弟子はそのままイエスの胸によりかかって、『主よ、だれのことですか』と尋ねると・・」（13：23～25）

「シモン・ペテロともうひとりの弟子とが、イエスについて行った。この弟子は大祭司の知り合いであったので、イエスと一緒に大祭司の中庭にはいった。」（18：15）

13 章の栄光の書に記された「ユダの裏切りの予告」があった晩餐の物語は、パンを裂き自分の体の記念とする場面はなく、共観福音書の「最後の晩餐」とは、場面が異なる。過越しの祭りの食事はいくつかあり、ヨハネの晩餐は過越祭の前の前の夜であったか。

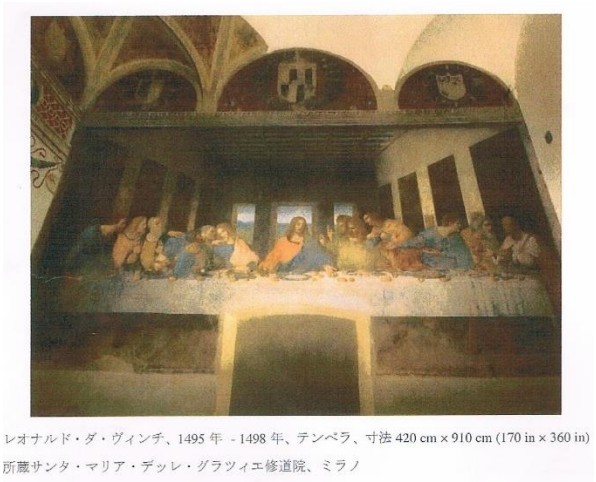
テキストには、ギリシャ語の文法で区別できる「愛弟子」が「3 人」いる。①イエスを目撃した著者である愛弟子ヨハネ（30～33 年）、②この世から去ったイエスについて証言する著者である愛弟子ヨハネ（33～80 年）③イエスをについて証明する編集者であるヨハネ共同体（85～90 年）

1 世紀終わりごろ、ペトロを頭とする初代教会とは別にヨハネ共同体の教会があり、統合されて行く過程で、ヨハネ共同体はそのアイデンティティを守るため、13～20 章の栄光の書に「愛弟子」の言葉として、イエスのいう「愛」の掟について特に強く語り、共観福音書にない部分を補っている。「互いに愛し合いなさい」という弟子の足を洗って模範を示す箇所は、イエスに愛された体験をもつヨハネ共同体の教えが反映されているとのこと

でした。

　イエスに愛された人は、他にラザロとその姉妹、マグダラのマリアなど何人もいる。次回の講座はマグダラのマリアについてとのことで、楽しみです。

「愛」はギリシャ語で、①無償の愛、②友情、③子への愛のような感情の愛がある。



レオナルド・ダ・ヴィンチ、1495 年 - 1498 年、テンペラ、寸法 420 cm × 910 cm (170 in × 360 in)
所蔵サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ修道院、ミラノ

レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」
イエスの左の「愛弟子」に「誰のことか聞いて」と頼むペトロ、そしてユダ。

Sieger Köder, 1925-2015, Ellwangen, Sieger Köder Museum Bild und Bibe

現代のジーガー・ケーダ作「最後の晩餐」　　「窓の外」から見て描くダ・ヴィンチの絵に対して、イエスと共にパンとブドウ酒を囲む視線で、イエスはその手と杯に映るその顔で表現されている

Sieger Köder, 1925-2015, Ellwangen, Sieger Köder Museum Bild und Bibe

ペトロの足を洗うイエス。その顔は盥に中に映る

2017 年 12 月 6 日

今日は午前中、船橋学習センターガリラヤのアンドレア・レンボ師の「ヨハネ福音書と西洋美術史」(10) を受講してきました。

テーマは「マグダラのマリア」、教会史の中でも難しく、誤解もされてきた人物とのこと。ルカ伝 8：27 では、「七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア」と紹介されていますが、同 7：36 の、通説では娼婦とも言われた「罪深い女」とは、全くの別人です。

彼女は、イエスの 3 年間の宣教活動にも同行し、4 福音書で、主の復活の朝の場面に登場し、マタイ・マルコ・ルカの福音では、香油を持って他の女性たちと墓を訪ねていますが、ヨハネ伝ではマグダラのマリアのみです。

ヨハネ 13：23 と 21：20 の晩餐の場面での「イエスに愛された弟子」とはだれか、初代教会はヨハネと伝えてきたが、実態は不明で、その人物はペトロでないことは確かであるが、男女の別もわからない。

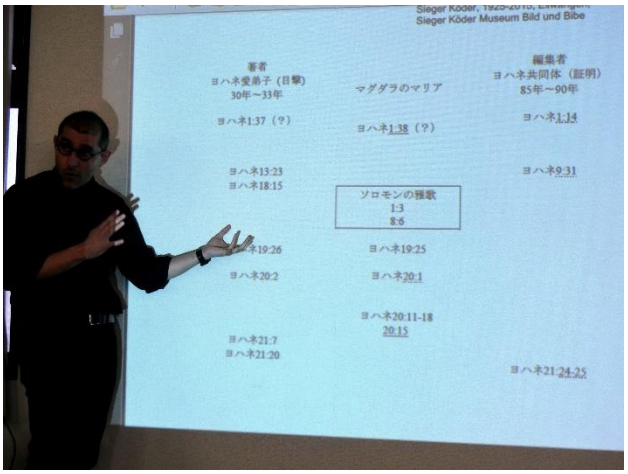
ヨハネは、ソロモンの雅歌 1：3「あなたの香油、流れるその香油のように／あなたの名はかぐわしい。おとめたちはあなたを慕っています。」を背景に、あたかもソロモンの婚礼の場面のように、自分の愛する人を探して、「園の新しい墓」（＝初夜の寝室？）を訪ねる女性として記している。

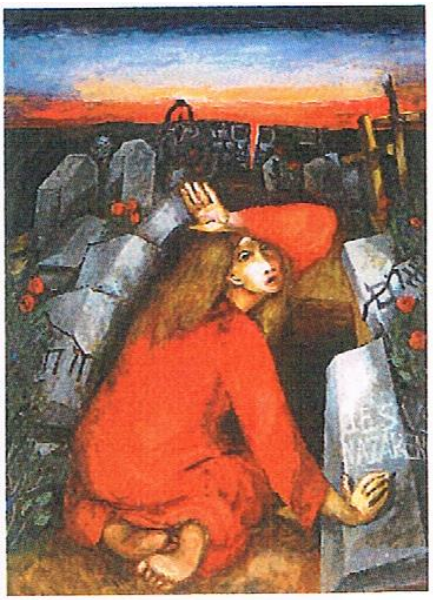
十字架の下にたたずむイエスの母と「愛弟子」とマグダラのマリアの 3 人。初代教会では、女性の助祭も活動していたとのことでした。

今日の講座の内容はとても難しく、またヨハネの「愛」についての感情（アンドレア師のそれ？）の吐露に眩暈がするようでした。

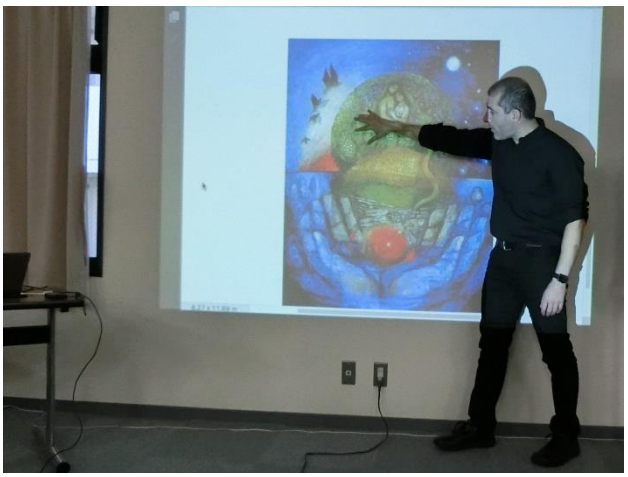
今期の講座は今日で最後。来期はまた新しいテーマで行われるとのことです。

笹沼さんの司会で、アンドレア師の講座が始まりました。



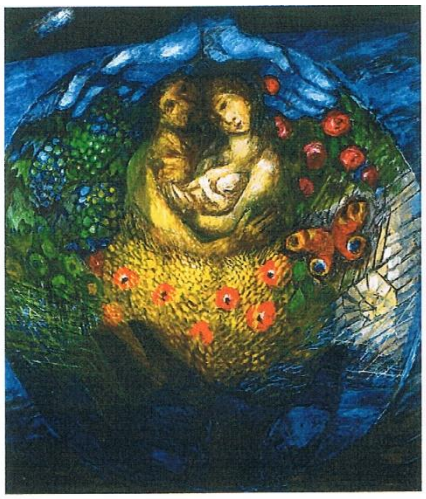


空の墓で戸惑うマグダラのマリア



「愛」の姿を描いた現代のケーダ師の作品

ソロモンの雅歌 8 : 6「わたしを刻みつけてください／あなたの心に、印章として／あなたの腕に、印章として。愛は死のように強く／熱情は陰府のように酷い。火花を散らして燃える炎。」



Sieger Köder, 1925-2015, Ellwangen, Sieger Köder Museum Bild und Bibe

Sieger Köder, 1925-2015, Ellwangen, Sieger Köder Museum Bild und Bibe